

【299】

氏 名（本籍）	こ いけ やすし 小 池 康（群馬県）		
学 位 の 種 類	博 士（言語学）		
学 位 記 番 号	博 乙 第 2045 号		
学位授与年月日	平成 16 年 7 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	近現代日本語モダリティ副詞の史的変遷に関する研究		
主 査	筑波大学教授	博士（文学）	湯 沢 質 幸
副 査	筑波大学教授		高 田 誠
副 査	筑波大学助教授		杉 本 武
副 査	筑波大学助教授		沼 田 善 子
副 査	筑波大学助教授		矢 澤 真 人

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語モダリティ副詞、およびその副詞と共に起る形式（以下「共起形式」と呼ぶ）の出現傾向が明治から平成にかけてどのように変遷してきたのかに関して、明治以降における大衆小説の調査・分析を通して、以下の 2 点を明らかにすることを目的としている。

- ① モダリティ副詞が、どのような変遷をたどったのか、もしくは、たどっているのか、またそのプロセス、そのモデルはどのようなものだったと想定されるのか。
- ② モダリティ副詞と①で得られたモデルの間に、どのような体系的な関連が存在するのか。

さらに、この 2 点を踏まえて、近現代のモダリティ副詞における変化が、近現代の日本語表現という枠組みの中で、どのような方向を指向したのかについても考察を進める。

本論文の構成は、以下の通りである。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 本論文の基本的な立場
- 第 3 章 推量のモダリティ副詞に関する考察
- 第 4 章 可能性想定 of モダリティ副詞に関する考察
- 第 5 章 否定判断のモダリティ副詞に関する考察
- 第 6 章 比況のモダリティ副詞に関する考察
- 第 7 章 対象副詞および共起モデルの統括的な考察
- 第 8 章 結論
- 参考文献

第 1 章は、先述の目的とともに、本論文の意義について述べる。その意義とは、本論文で提示するモデルが、先行研究の不備を補足し、さらには言語変化研究の新たな視座および研究の深化をもたらすものになると考えられることである。なお、本章は本論文がモダリティ副詞を対象とした理由についても触れる。

第 2 章は、本論文での議論を進める上で基本となる諸概念について、その定義と規定を行う。まず、「モ

ダリティ」に関して、先行研究を鑑みた上で本論文における規定を行ない、次に「モダリティ副詞」および「モダリティ形式」についての規定をする。さらに、「共起」と「呼応」という術語の差異について触れ、本論文では「共起」という術語を用いる理由を述べる。そして、その後、資料およびその分析法について論を進め、本論文を通じて分析上の軸となる「共起モデル」をあらかじめ提示し、それについて説明を加える。

ところで、この共起モデルには二種のモデルが設定される。一つは、用例の数すなわち共起形式別の用例数の多さに主眼を置いた、いわば量的な側面から立てたモデルである。これを「量的共起モデル」と呼ぶ。もう一つは、用例数より当該の対象副詞がどのような意味（モダリティ）を持つ形式と共起する傾向にあるのかということに主眼を置いた、いわば質的な側面から立てたモデルである。これを「質的共起モデル」と呼ぶ。

「量的共起モデル」において、本論文の分析では四つのタイプを認める。すなわち、時期の変遷に伴って当該のモダリティ副詞と共起する形式が多様化していく「累加型」、逆に時期の変遷に伴って共起形式が減少していく「漸減型」、また複数の共起形式それぞれの占める割合がどの時期においても一定の傾向を示す「共立型」、そして、ある一形式とのみ共起する「専立型」の計4つである。

一方「質的共起モデル」には、二つのボタンがあると想定する。すなわち、共起する形式のモダリティが多岐にわたる「複数モダリティ共起型」と、共起形式のモダリティがある特定の一モダリティに限られている「単一モダリティ共起型」とを設定する。

第3章から第6章までは、モダリティ副詞のグループごとの具体的な分析と考察を行なう。この四つの章を貫く基本的な論述方式は、まず当該の章で扱うモダリティ副詞を選定し、次に、それらの副詞の場合、明治期以降現代期に至るまでの間どのような出現傾向があるのかを観察する。そしてその後、各副詞とその共起形式の関係について考察するというものである。つまり、各副詞の共起形式にはどのようなものがあり、時代の変遷の中でその共起形式がどのように変わっていったのか、また変わらなかったのかを考察していく。そして、適宜、各章で特に注意すべきモダリティ副詞が、そのような変化をするに至った原因・理由に対して考察を加える。最後に、以上のような考察を踏まえつつ、各副詞の共起パタンの異同によって先に述べたような二つの共起モデルを抽出する。

以下、第3章から第6章までにおいて取り上げた個々の副詞と、考察の結果の概略を述べる。

第3章では、推量のモダリティ副詞－オソラク、タブン、キット、サダメシーについて分析を行なう。各副詞の量的共起モデルおよび質的共起モデル（以下、「量的／質的共起モデル」と呼ぶ）は、以下の通りである。

推量のモダリティ副詞；オソラク：累加型・複数モダリティ共起型／タブン：累加型・複数モダリティ共起型／キット：共立型・複数モダリティ共起型／サダメシ：専立型・単一モダリティ共起型

第4章では、可能性想定（仮定）のモダリティ副詞－モシカスルト、ヒョットスルト、コトニヨルト、およびそれぞれの変異形も含めた副詞－に関する分析を行う。各副詞の量的／質的共起モデルは、以下の通りである。

可能性想定（仮定）のモダリティ副詞；モシカスルト類：累加型・単一モダリティ共起型／ヒョットスルト類：共立型・単一モダリティ共起型／コトニヨルト類：専立型・単一モダリティ共起型

第5章では、否定判断のモダリティ副詞－マサカ、ヨモヤ－を取り上げる。各副詞の量的／質的共起モデルは、以下の通りである。

否定判断のモダリティ副詞；マサカ：漸減型・単一モダリティ共起型／ヨモヤ：専立型・単一モダリティ共起型

第6章では、比況のモダリティ副詞－マルデ、アタカモ、サナガラ－に関して分析を行なう。各副詞の量的／質的共起モデルは、以下の通りである。

比況のモダリティ副詞；マルデ：共立型・単一モダリティ共起型／アタカモ：漸減型・単一モダリティ共起型／サナガラ：漸減型・単一モダリティ共起型

第7章では、前章までの分析の結果を踏まえ、各副詞の出現傾向および共起モデル間の関連について考察を行なう。

まず、各モダリティ副詞間の出現傾向については、それぞれの副詞はそれぞれのグループの中でさまざまな盛衰を見せているが、その盛衰の過程はあたかも同一のモダリティを持つ副詞のグループの中で、当該のモダリティを持つ副詞が一つの副詞で代表されるかのような傾向、言わば「一モダリティ副詞の傾向」とでも呼びうるような傾向を呈していることを指摘する。そして、そのような傾向が、「表現の論理化」を指向した流れ（「分析的傾向」）による、各モダリティ副詞の体系内における整理化の結果であると推察する。

次に、量的共起モデルの四つの型に関しては、以下のような関係を認める。まず、複数の共起形式を有する共立型と一つの共起形式を有する専立型を、対立的に位置づける。そして、共立型、累加型、漸減型の各型は、共立型を中心に双方向に働きあっていると想定されるのに対し、専立型は累加型、漸減型と一方向の関係しか認められないとする。さらに、モダリティ副詞とその共起形式の変遷は、時期の変化に伴って四つの型の間を移行するものであることを論証する。

次に、質的共起モデルの二つの関係については、「共起形式の制約」という点において、複数モダリティ共起型の方が単一モダリティ共起型よりも制約が小さく、その分モダリティが当該のモダリティ副詞にやきついていることを述べる。そして、その点において、複数モダリティ共起型の副詞は、文字通り「モダリティ副詞」と呼ぶにふさわしいものであること、逆に単一モダリティ共起型の副詞は「準モダリティ副詞」と呼ぶうるものであることを指摘する。

第8章は、本論文のまとめと今後の展望について述べる。そしてさらに、本論文は近現代における日本語表現（史）研究にも敷衍できる可能性を持つと主張する。すなわち、本論文で明らかにしたモダリティ副詞の変遷は、近現代以降の日本語表現全体に見受けられる「一語一義化」への指向、換言するとできるだけわかりやすい日本語表現への指向という一般的な流れの中にあると結論づける。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語モダリティの研究は、日本語文法研究の支柱の一つとして、今日まで数多くの研究者によって積極的に押し進められてきた。そして、めざましい発展を遂げた。その中にあって、大衆小説を資料として明治時代から平成までの、日本語モダリティ副詞そのもの、およびその副詞と共起する形式がどのように出現しているのか（使われているのか）、そして、その現れ方は時間の経過とともにどのように変遷し今日に至っているのかを解明しようとしている本論文は、意欲的かつユニークな研究と認められる。すなわち、次の三点において評価される。

- ①通時の研究であること。これまでに行われてきたモダリティ副詞の研究のほとんどは、共時論的観点からその性格や意味などを明らかにしようとしているものばかりであると言って過言でない。特に、明治期から今日までにおけるその変遷を通観しようとした研究は皆無である。
- ②量的な面から接近していること。モダリティ副詞は従来通例質的な面から研究されてきた。もちろん、それはそれで副詞の研究においては必要にして不可欠である。のみならず、これまでも量的な面からの検討がなされてこなかったわけではない。しかし、本論文ほど多量のデータに基づいて議論を重ねている研究はほかに類を見ない。
- ③モダリティ副詞やその変遷のあり方についてモデルを設けて説明を試みていること。データの分析によって明らかにされた各モダリティ副詞の現れ方や変遷のあり方を類型化してモデルを立て、ついによって歴史の変遷の指向するものを解明しようとしている点は特筆に値する。すなわち、これは、体系的にモダリティ副詞の歴史の変遷を説明しようとしていることにほかならない。

これら①②③があいまって、本論文を説得力あるものとしている。なお、このほか、近現代における日本語表現全体にわたる変化との関わり合いにおいてモダリティ副詞をとらえようとしている点や、一般的なデータファイルだけでなく、自ら直接調査した数多くの小説から多量のデータを収集している点なども見逃せない。

ただし、モダリティ副詞のすべてを取り扱っているわけではないこと、分析方法や説明の仕方などにおいて改善の余地があること、データの出処に偏りが見られることなど、今後に期待せざるをえない所もいくつか残されている。しかしながら、それによって着眼点や手法、成果、スケール等における本論文の価値が左右されるわけではない。

以上、本論文は、今後におけるこの方面の研究への寄与が大いに期待される斬新な論考と認められる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。